

## ABDA 理論とは: 学術版 (論文を簡略化したものです)

自分の考えを筋道立てて伝える力、として習得を目指す学習理論

© 2026 Hideki Kidoguchi

多くの学習者は、挨拶や日常会話を超えて、「自分の考えを英語で議論できるようになりたい」と感じています。

しかし実際には、流暢であっても内容の浅い会話にとどまってしまうケースも少なくありません。

ABDA 理論は、この課題に対して、内容と思考を伴った英語運用能力の育成を目標とします。

言語の記憶は、人の五感を通じて、状況や場面、そして心的なインパクトと結びついて形成されます。

このため、従来は外国語での実体験、すなわち留学などの環境が重要とされてきました。

ABDA 理論は、この「環境への依存」という壁を乗り越えることを目指します。本理論は、以下の認知的要素の統合に基づいて構築されています：

- ・ 表象 (mental representation)
- ・ 音韻記憶 (phonological memory)
- ・ 物語 (narrative)
- ・ 疑似エピソード記憶 (pseudo-episodic memory)

(先行研究の出典、記憶モデルについては章末をご参照ください)

## ABDA プログラムのメカニズム

Act-Based Dialogue Approach (ABDA) は、4コマの意味のある連続場面をベースにした対話型学習法です。

本プログラムは認知科学の知見に基づき、従来の英語学習とは異なるアプローチによって、高い学習効果を目指して設計されています。

Act-Based Dialogue Approach (ABDA) は、4コマの意味のある連続場面をベースにした対話型学習法です。

## ABDA の特性(1)

## 吹き出しのイラストから「言いたいこと」を瞬時に引き出す訓練

### —【視覚表象】から発話を引き出す—

ABDA の発話訓練(発話ステージ)の最大の特徴は、4コマの場면을視覚的に把握した後、吹き出し内のイラストを手がかりに発話を行う点にあります。

ここで重要なのは、発話内容を「記憶した英文」から再生するのではなく、イラスト(視覚情報)から直観的に想起することです。

このプロセスは、人が発話内容をあらかじめ文として組み立てるのではなく、言語記憶を構成する「心的表象(mental representations)」が再構成され、検索・想起される過程に近いものです。

そのため ABDA の発話は、暗記した英文を順に思い出す「記憶—再生」ではなく

イラスト・音声・ストーリーによって形成された表象を直観的に検索・想起するプロセスとして行われます。学習の初期段階では、発話は部分的で断片的(まだら)になります。しかし、これは自然な過程であり問題ではありません。

「分析ステージ」と「発話ステージ」を継続することで、語彙・文構造・知識が徐々に補完され、発話は次第に自然で滑らかなものへと発展していきます。

この「心的表象から発話へ至るプロセス」は、従来の日本の英語教育(特に英会話)において十分に扱われてこなかった要素です。その結果、学習者は「言いたいことがすぐに言えない」という課題を抱えてきたと考えられます。

※上級レベルでは、抽象的な内容を扱うため、イラストに加えて語彙や句を用いて表現する場合があります。これらも意味表象の一部として、イラスト・音声・ストーリーと統合され、発話内容の想起を支える重要な手がかりとなります。

## ABDA の特性(2)

### 複数の心的表象と疑似エピソード記憶

ABDA では、イラスト・音声・文(日本語／英語)・物語という複数の情報が統合され、4コマの連続ストーリーとして提示されます。これらの要素が結合することで、学習内容はマルチモーダルな情報として処理され、現実の体験に類似した\*\*「疑似エピソード記憶」\*\*として保持されます。

エピソード記憶とは、本来、  
個人が過去に実際に経験した出来事の記憶を指します。  
しかしこの記憶は、時間の経過とともに、  
そのすべてが保持されるわけではありません。

実際には、

- 視覚的イメージ
- 音声的記憶
- 感覚的印象

といった複数の心的表象の一部が残る形で保持されます。

この特性により、時間の経過とともに、実際のエピソード記憶と  
疑似エピソード記憶との境界は次第に曖昧になります。  
この現象は先行研究でも指摘されています。

ABDAにおいて、イラストが白黒の線画で構成されているのは、  
記憶への負荷を抑え、表象としての保持を容易にするためです。

さらに、連続した4コマストーリーを反復学習することで、  
その内容は実体験に近い形で記憶に定着していきます。  
この過程では、いわゆるソースモニタリング・エラーが生じ、  
疑似エピソードが実際の経験に近い形で扱われるようになります。

このように形成された記憶は、  
日常生活において類似した状況に直面した際に再構成されます。

その際、

- イラスト
- 音声
- 文／文脈

といった心的表象のいずれかが手がかりとなり、  
状況に即した発話が自然に引き出されます。

さらに、既存の表象に新たな語彙や表現が補われることで、  
新しい発話が生成されやすくなります。

このプロセスは、

記憶とは「保存」ではなく、再構成的想起である  
(Frederic Bartlett, 1932)

という認知心理学の知見とも一致しています。

したがって、ABDAにおける発話は、単に暗記した内容を再生するものではなく、記憶の再構成に基づく生成的なプロセスとして位置づけられます。

## ABDA の特性(3)

### 初期段階から重要な文構造を定着させる

多くの言語習得において、幼児が語彙や文法を体系的に学ぶことはほとんどありません。それにもかかわらず、自然な言語運用能力は形成されていきます。

一方、日本の学校英語では、語彙や文法ルールを段階的に習得すれば、言語が使いこなせるようになるという考え方が根強く存在しています。

ABDA は、この前提を見直します。

本プログラムでは、初級段階の対話の中に、重要な文法構造や語彙をあらかじめ組み込んでいます。

それらは、明確で自然な文脈の中で提示され、学習者は「言いたいこと」を表現する過程で、それらの構造に繰り返し触れることとなります。

従来 of 学習では、

- 容易な文法から複雑な文法へと段階的に進むため
- 初期段階の英文は内容が限定されやすく
- 表現の幅や実用性に乏しくなる傾向がありました

その結果、「言いたいことが言える基盤」の形成が後回しにされがちでした。

ABDA では、学習の初期から、意味のある対話の中で語彙や文構造が自然に使用されます。

そのため、

- 高度な語彙や文構造も無理なく接触頻度が高まり
- 意識的な暗記に頼らず
- 深層的なレベルで定着していきます。

このようなアプローチは、従来の文法積み上げ型の指導法とは大きく異なる発想に基づいています。

## ABDA の特性(4)

## 段階的に文構造と論理性を深め、思考力を育てる

ABDA 教材は、複数の段階的構造によって、  
文構造と論理性を無理なく発達させるよう設計されています。

### (1) 4コマ構造(起承転結)

各ストーリーは、基本的に起承転結の構造を持ち、  
論理的な展開を自然に理解できるようになっています。

### (2) 3層構造(初級・中級・上級)

一つのテーマは、

- 初級
- 中級
- 上級

の3段階で構成されています。

レベルが上がるにつれて、

- 内容がより深くなり
- 表現の幅が広がり
- 論理性が高まります

### (3) 15話の発展構造(具体 → 抽象)

全 15 話は、

具体的な話題から抽象的・概念的な内容へと段階的に発展します。

これにより、学習者は無理なく思考のレベルを高めていくことができます。

### (4) 家族モデルによる疑似体験

ABDA では、6人の家族を中心としたストーリー構成を採用しています。  
登場人物は、若者からシニアまで幅広く設定されています。

学習者は、場面ごとに異なる立場の人物として発話することで、  
多様な視点や思考様式を疑似的に体験します。

この構成により、

- 抽象的で中性的な英語表現が
- 具体的な意味を持つ発話へと変化します

またこのプロセスは、

言語習得が、家族や身近な人間関係を起点に発達する

という自然な学習過程にも対応しています。

その結果、学習者は独学であっても、  
多様な疑似エピソードを通じて他者との関わりを経験し、  
記憶に残りやすい形で言語を習得することが可能になります。

## 発達過程としての中間言語 (interlanguage)

学習が進み、文構造や論理性が高度になるにつれて、  
発話の中に中間言語 (interlanguage) が現れます。

これは、

上級レベルの内容を、初級・中級レベルの表現で試みる段階

を意味します。

この現象は自然なものであり、  
学習者が思考と表現のレベルを引き上げようとする過程において、  
不可欠なステップです。

この段階では、

- 言い換え (パラフレーズ)
- 表現の試行錯誤

が活発に行われます。

その結果、

多様な状況に対応できる柔軟な表現力と、  
説得力のある発話能力

が形成されていきます。これが、ABDA の目指す最終到達段階です。

## 最後に

ABDA 理論は、学習対象者や教育環境に応じて、  
扱う言語、分野、トピック、イラストなどを柔軟に設計できる特性を有していま  
す。

本理論に基づき、表現力・思考力・論理性を段階的に統合して訓練すること  
で、

学習者が「言いたいことを論理的に表現できる基盤」を形成することが期待されます。

また本教材は対話形式を基盤としながらも、高度な英文読解や英作文に対応可能な文構造と解説を組み込んでいます。

ABDA 理論は、学校や大学の授業でも有効に活用できると考えられます。

例えば、

- 自宅での個別学習(音声・分析ノート)
- 教室でのロールプレイや対話活動

を組み合わせることで、学習の質を高めることが可能です。

また、「分析ノート」を活用した学校や大学での解説は、学習者が主体的に理解を深める契機となり得ます。

このような学習環境のもとでは、学習者が英語を用いて自然に意見交換を行う場面が増え、教室内外における言語活動の質的な変化が期待されます。

それは、今後の変化する社会において求められる実践的な言語運用能力の育成にもつながる可能性があります。

さらに、必要に応じて英語で論理的に対話・議論ができるという能力は、長期的な視点における知的基盤の形成にも寄与すると考えられます。

ABDA プログラムは、単なる「学び直し」にとどまるものではなく、学習者が継続的に自己効力感を高めながら取り組むことのできる、実践的かつ持続可能な学習手段の一つとして位置づけられます。

---

### \*【疑似エピソード記憶】

疑似エピソード記憶とは、過去を「思い出している」という現体験が、実際の過去とは独立に、現在の心的過程によって構成されたものである。

### 疑似エピソード記憶学習モデル

【刺激提示：4コマイラスト】

低負荷イラスト(視覚表象)+会話音声(聴覚表象)+文脈情報(文/文脈:テーマの内容)

↓

### 【心的表象の生成】

視覚イメージ ↔ 聴覚イメージ ↔ 文/文脈イメージ

↓

## 【統合】

### 疑似エピソード表象

想起時に「自分が体験した記憶(エピソード記憶)」のように記憶が再構成される  
(これはソースモニタリング・エラーのため: 「どこで得た情報か」を取り違える現象)

---

### 【記憶システムへの定着】

疑似エピソード記憶(自分の出来事としての記憶)

+

意味記憶(語彙・文法・文構造・表現知識)

↓

【統合】

学習者が適宜・適所で【想起・再利用・再構成・生成】が可能

〈記憶とは静的な貯蔵ではなく、過去の体験を再構成し想起する  
動的な過程である: Bartlett, 1932〉

### 参考文献 (References)

- Pearson, J. (2019). *The cognitive neuroscience of visual mental imagery*. *Nature Reviews Neuroscience*, 20, 624–634.
- Gallo, D. A. & Wheeler, M. E. (2013). “Episodic Memory”. In *The Oxford Handbook of Cognitive Psychology*, David A. Gallo (Ed.). Oxford University Press, pp. 188-205.
- Hickok, G., & Poeppel, D. (2007). *The cortical organization of speech processing*. *Nature Reviews Neuroscience*, 8(5), 393–402.
- Schacter, D. L., Norman, K. A., & Koutstaal, W. (1998) *Memory distortion: How minds, brains, and societies reconstruct the past*. *Annual Review of Psychology*, 49, 289–318.
- “Loftus, E. F., & Pickrell, J. E. (1995) The Formation of False Memories” *Psychiatric Annals*, Vol. 25(12), pp. 720-725. SLACK, Inc.
- Bruner, J. (1991). *The narrative construction of reality*. *Critical Inquiry*. [Vol. 18, No. 1 \(Autumn\)](#), 1-21 : The University of Chicago Press.
- Bartlett, F. C. (1932). *Remembering: A study in experimental and social psychology*. Cambridge University Press.